

(仮) 円山動物園ポスト基本構想

第五回検討部会

平成 30 年 3 月 12 日 (月) 14:00~17:00

札幌市円山動物園 動物プラザ

議事次第

1. 開会

2. 議事

(1) 報告

- ア) 市民意識調査の結果について
- イ) ポスト基本構想の進捗について

(2) 意見交換

- ア) ポスト基本構想の内容について

3. 閉会

札幌市円山動物園 ビジョン2050

「自然と人との共生する
社会を目指して」

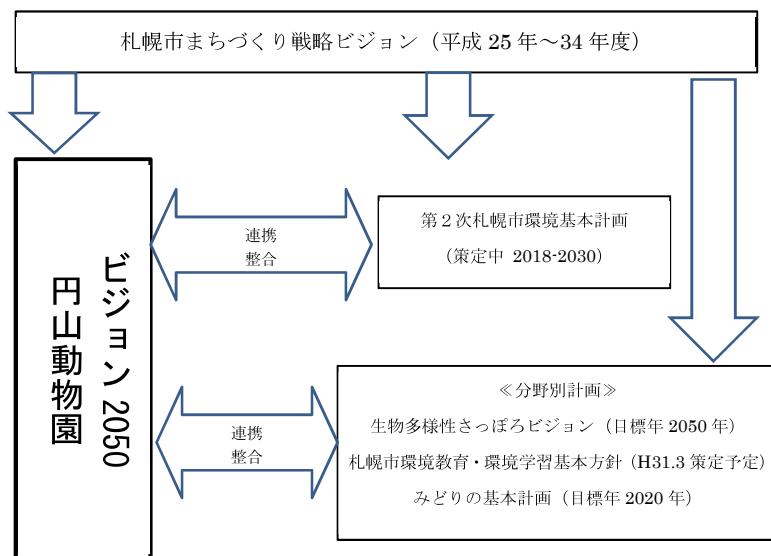
編集・発行
札幌市円山動物園

〒064-0959 札幌市中央区宮ヶ丘3番地1
電話:011-621-1426

市長挨拶

はじめに

円山動物園ビジョン2050と各種計画等との整合性



目次 contents

I 円山動物園の目指す未来	
ビジョン2050	1
基本理念	1
取組の構図	2
II 円山動物園の基本理念	
生物多様性の保全	3
環境教育	7
III 基本理念を支える取組み	
調査と研究	11
レクリエーション	13
動物福祉	15
連携	17
IV 体制	
コレクションプラン	18
行動指針	20

I 円山動物園の目指す未来

I-1. 円山動物園ビジョン2050

円山動物園は、自然と人が共生する社会を築くことを目指します。人が自然環境の一部であることを認識し、誰もが自然の必要性を感じ行動する。そんな社会を、2050年までにみんなで協力して実現させましょう。

Vision
2050

全ての人が自然とともに歩む社会になる

全ての人が当然の行動として自然を大切にする

全ての人が自然環境の大切さを実感する

I-2. 基本理念として

ビジョン2050を達成するために以下の二つを基本理念とします。

生物多様性を保全する

生物多様性を保全するために、生息地環境の保全とともに、種や個体群の維持に取り組みます。

自然の大切さと動物の魅力を伝える

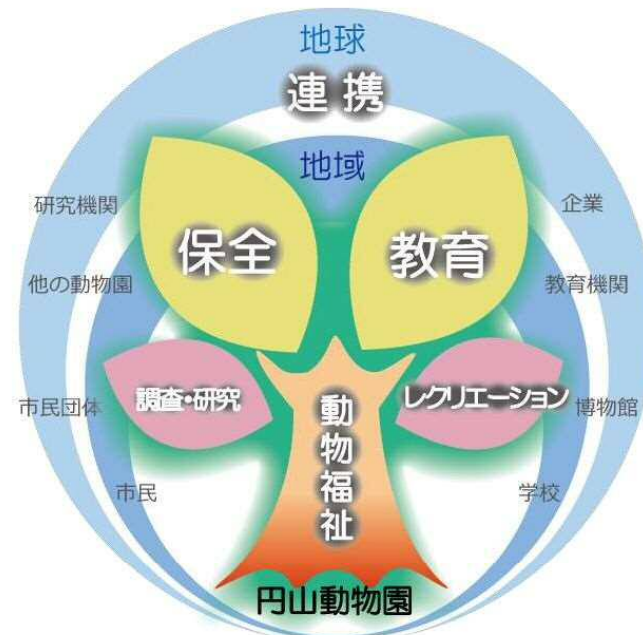
楽しさや感動、記憶に残る体験を通して、動物の素晴らしさや魅力、自然環境の大切さを伝えます。

地球のために、地域のために

地球上の数多くの野生動物が絶滅の危機にあるなか、世界中が協力して保全活動に取り組む必要があります。円山動物園もその役割の一端を担わなければなりません。一人ひとりの生活は、地球環境につながっています。世界の野生動物の生息環境の現状を伝え、より多くの人たちに地球規模の環境保全への意識を高めてもらうことも、円山動物園の大事な役割です。

一方、円山動物園は、周囲に広がる円山原始林をはじめ、市民にとって欠かせない身近な生態系を守り育ていく役割も担います。また、市民の安全かつ快適な憩いの場、学びの場としての役割、市民や学校、研究機関、企業などをつなぎ連携を促す役割など、地域のために取り組んでいきます。

I-3. 取組みの構図



円山動物園を一本の「木」にたとえ、円山動物園の取り組みの位置づけを表します。

この円山動物園の木は、基本理念である『保全（生物多様性の保全）』と『教育（環境教育の推進）』という葉を、広く大きく、展開させます。身近な地域へと、そして遠く地球全体へと、たくさんの葉を茂らせませす。

保全と教育という、大きな理念尾葉を広く大きく茂らせるためには、そのほかにも、葉が必要です。来園者を楽しませるレクリエーション、調査・研究という葉も大事な役割です。

木の「根幹」にあたるのが『動物福祉』の取り組みです。根はあまり目立たない地味な部位ですが、しっかりと根を張り太い幹をつくることで、円山動物園の木がしっかりと支えることができます。動物たちの幸せを追求するという姿勢をしっかりと根付かせ、太い幹をつくりあげます。

この木の周囲に広がる園は、円山動物園がときに頼り、いっしょに歩む外の世界を示しています。市民の皆さんや、学校、企業、研究機関などの声や力を、葉や根から吸収することで、この木は大きく育ちます。

そして円山動物園の「木」が、他の動物園や博物館、学校、市民といったほかの「木々」と連携することで、円山原始林のような豊かな「森」を築き、さまざまな動植物そして我々人類を支えていければと考えています。

II 円山動物園の基本理念



II-1. 生物多様性を保全する

円山動物園は、生態系の多様性・種の多様性・遺伝子の多様性という、全てのレベルで、生物多様性の保全に取り組みます。



動物園に求められる保全への貢献

近年、地球上の動植物種がかつてない速さで絶滅しています。伴侶動物(犬や猫)や畜産動物(牛や豚)ではなく、野生動物種を飼育する動物園は、ただ動物を飼育し展示するだけでなく、野生動物種の生息地の保全、野生下での個体群の維持に貢献することが求められています。

生息地の環境をまもる

生物多様性を保全するには、生物が生きていける環境をまもることが何よりも重要です。円山動物園の職員は、積極的に動物園の外に出て、野外の保全活動に参加します。保全活動の現場感覚を養い、どのような取り組みが求められているのかをしっかりと理解します。

動物園が野生動物種を飼育する意義は、その動物種の本来の生息地の保全に還元されてこそ意味があります。生息環境の現状を理解し、来園者に正しく伝えるために、飼育展示する動物種の本来の生息地に赴くなど、つねに飼育するすべての動物の保全への貢献を念頭に置いて取り組みます。

各地で行われている保全活動から学びつつ、円山動物園の独自の保全活動を企画・立案し、主体的に野外での保全活動を展開します。

個々の野生動物をとりまく環境を生態系レベルで維持するために、森林や河川、草原、湿地、干潟などの環境を保全します。

☑ 生息地での取り組み

生息地の環境を保全するためには、たとえば現地の植生、河川の水質、土壌の状態、餌となる生物の存在量など、様々な状況を把握し、維持させる必要がある。

(ミャンマーの取り組み?)



Vision
2050

保全活動の交流拠点としての要に

各地の保全活動に欠かせない存在に

さまざまな保全活動に参加し、実践

世界各地に生息する多彩な野生動物種に関わっている動物園だからこそ、いろいろな地域で、いろいろな動物種を対象に保全活動している人や団体を、結びつける交流拠点になることができます。円山動物園は、2050年にまでに、保全活動の中心的な施設となります。

健全な地域生態系を維持する

円山動物園と地域の生態系との繋がりを重視して、哺乳類や鳥類など動物園で飼育する生物だけでなく、昆虫や植物なども含めた生態系の保全に取り組みます。

円山動物園は、円山原始林という豊かな自然環境に隣接しています。この円山原始林という札幌市民の生活にとって欠かせない生態系を守り育てていくための拠点として活動します。

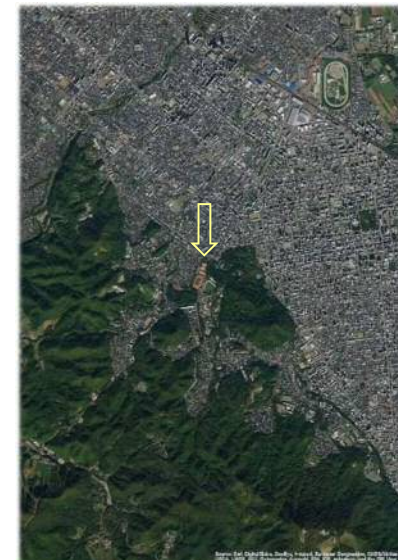
人間社会と野生動物の軋轢を軽減し、よりよい関係を築くためには、農作物被害をはじめとする獣害への対策や、増えすぎた個体数を減らすなどの対策も必要です。円山動物園も、野生動物の獣害対策や個体数管理による健全な生態系の維持を担います。

地域の生態系を適切に保全するため、生態系を攪乱し悪影響を与える外来生物の除去活動や、拡散防止に取り組みます。

☑ 外来生物

外来生物とは、本来生息しない地域に人間の活動によって持ち込まれた生物のこと。円山動物園の周辺でも在来の生態系に様々な影響を与えている。

(画像)
オオハンゴンソウの抜き取り
(準備中)



円山動物園は、たくさんの人が暮らす都市部と、豊かな大自然が交わる場所に位置します。

種や地域個体群を絶滅から救う

動物園で飼育していない、飼育ができない絶滅危惧種もたくさんいます。円山動物園は、保全活動の中心拠点として必要な政策を提言できるよう、飼育動物に限らず、さまざまな希少種や絶滅危惧種の生息状況・保全状況をしっかりと把握し、保全に必要な取り組みを判断します。

野生動物の保全は、なによりまず野生個体群や生息環境の維持・回復が優先されます。広い枠組みにおける保全政策のバランスを重視し、円山動物園に何が求められているかを考え判断します。そのために、外部の保全機関や研究機関から専門家を招聘し、円山動物園の実施する保全活動方針を審議・判断する検討委員会を設置するなど、戦略的かつ有効的な保全活動を行います。

本来の生息地で個体数を減少させている野生動物種にとって、動物園は個体群維持のための貴重な生息地の一部と考えることができます。動物園ではこうした希少種・絶滅危惧種の飼育や繁殖に取り組むとともに、野生復帰にも取り組みます。

野生個体群の生息状況をしっかりと踏まえた上で、飼育下においても遺伝的多様性を保ち、野外個体群への再導入に備えます。

飼育個体群において、近親交配による近交弱勢の影響を避けるためにも、適切な血統管理を行います。



☑ 生息域外保全

本来の生息地以外の場所で種や個体群を維持すること。動物園で飼育した個体や、園内での繁殖によって生まれた個体を野外に放すことで、野生個体群を維持できる場合がある。

☑ レッドリスト

絶滅の危機に瀕している野生生物のリストのこと。国際自然保護連合(IUCN)や環境省をはじめ、さまざまな団体や自治体が作成している。札幌市が策定したレッドリストでは、最も危険度の高い「絶滅危惧 I A類」として、クロテン、シマアオジ、イトウなどが記載されている。

シマアオジヤクロテン
(準備中)

地球規模の持続可能性を考える

資源やエネルギーの効率的活用を行うため、水や熱の循環設備の導入を進め、再生可能エネルギーを積極的に活用します。

園内で排出されるゴミの再資源化や分別の徹底、節電などによる無駄なエネルギーの使用削減などにより、温室効果ガスの排出を削減します。

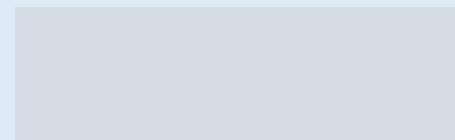
園内での販売物にフェアトレード商品を選択したり、食品をはじめとする大量廃棄を抑制するなど、園内全ての施設をあげて地球環境への負荷の低減に取り組めます。

地球規模の環境問題の取り組みのためにSDGs(持続可能な開発目標)を念頭に置いて活動します。17の目標のうち、「15 陸上資源」を筆頭に、「4 教育」「6 水・衛生」「7 エネルギー」「12 生産・消費」「13 気候変動」「14 海洋資源」について円山動物園でも取り組みます。



☑ 再生可能エネルギーの導入

円山動物園での実施例
(準備中)



☑ SDGs(持続可能な開発目標)

SDGs(Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標)とは、2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて設定された国際目標。持続可能な社会を実現するための重要な指針で、発展途上国だけでなく、先進国も取り組む。17の目標(ゴール)が設定されている。





II-2. 自然の大切さと動物の魅力を伝える

Vision
2050

動物園では、たくさんの「感動」を通して、動物の不思議さや魅力、そして自然の大切さを感じてほしいと願っています。動物園が入口になって、野生動物や自然環境への関心をよりいそお引き出すことを目指します。



動物園は情報の発信基地

「自然と人が共生する社会」を実現するためには、人々の環境に対する意識を大きく高める必要があります。動物園は、園内で暮らす動物たちの力を借りて、生息地環境の現状や保全の必要性を発信することができます。また、動物の多様な生態や行動は、豊かな自然環境を大切に思う心をはぐくむ機能を持っており、自発的に環境行動をとる動機付けとなります。

野生からのメッセンジャー

円山動物園は、園内で飼育する動物たちを、地球からの預かりもの、様々なメッセージを伝える大使だと考えています。動物の飼育展示を通して、動物たちの姿や形だけではなく、さまざまな野生動物が存在する地球環境の素晴らしさ、生態系サービスの重要性を伝えるような普及啓発を行います。動物たちの本来の生息環境に思いを馳せてもらう、野生下での現状について考えてもらえるよう工夫します。

動物たちの形態や行動の様々な特徴は、進化という現象を通して地球環境によって作り上げられたものです。人と動物がよりよい関係を築くためには、可愛いとか、きれいだといった動物たちの一面だけではなく、地球環境の中で培われた逞しさやしたたかさ、あるいは脆さや儂さを伝えることも必要です。人間との適切な距離感、野生個体への配慮などについても発信していきます。

我々の日常生活が遠い地域の環境に負荷を与えていることも少なくありません。円山動物園では、各地域で保全や研究にとりくむ団体や機関が情報を発信し、普及啓発活動に取り組める状況を構築します。それぞれの市民に何ができるのか、野生からのメッセージをどう受け取り、何をすべきか考えていけるよう、円山動物園が現地とつなぐ役目を果たします。

☑ サイン

飼育展示している動物や、その生息環境のことを説明する解説版や展示物のことを「サイン」と呼ぶ。サインには、たんに飼育種の生物学的な特徴を説明するだけでなく、より関心や興味を深めてもらえる工夫が施す必要がある。

(画像)
ホッキョクグマ館のサイン
(準備中)

円山動物園を中心としたフィールドミュージアムの構築

様々な地域で様々な機関とともに融合的な教育環境を創出

豊かな周辺環境を効果的に利用した環境教育を実践

動物園で暮らす動物たちに加え、博物館やネイチャーセンターなどの施設、円山動物園をとりまく豊かな生態系、市内や道内の数々の自然公園など、すべてが体験の場であり学びの場です。2050年までに、動物園の枠をこえた「フィールドミュージアム」という概念のもと、さまざまな地域や機関が有機的に結びついて自然の大切や動物の魅力を伝える総合環境を築きあげます。

野生へ誘(いざな)う扉

動物園を訪れたことをきっかけに、普段からより野生動物に親近感が持てたり、身近な生き物への関心が高めてもらえるよう、動物園が野生への入り口として機能するよう工夫します。円山動物園で学んだあと、自分自身で自然観察ができるよう観察方法を伝えたり、他の地域に野生動物を見に行きたくなるよう動物園外部の他の施設や観察地を紹介するなど、次のステップにつながる伝え方に取り組みます。

適切な野生動物との付き合い方を考え、来園者や市民に伝えます。野生動物種が、愛玩動物種(ペット)と異なることをつねに意識し、人間と野生動物とのつきあい方や距離感、野生動物としての生命観を考えてもらう機会を提供します。

動物たちが自然界から切り離された存在ではなく、自然環境の中の一つの要素として存在していることを感じてもらえるような、展示の仕方や伝え方を導入します。飼育者だけでなく、動物園内全てを、できるだけ自然に近い状態に整備します。また円山動物園の森などを使って、園内でも自然環境を体感してもらえるよう取り組みます。



☑ 動物園の森

画像
準備中

“生きている”を伝える博物館

動物園は生きた動物を展示する博物館です。動物の生の姿、声、匂いを実際に感じることで、テレビやインターネットとは異なる、本当の生命を実感してもらうことが動物園の大きな特徴です。来園者に豊かな感性を育ててもらえるよう、展示の仕方を常に改善し、よりよい伝え方を考えていきます。

来園者に伝えたいテーマをしっかりと考慮・検討し、行動の面白さを伝えたり、野外環境をイメージできるように自然な景観の中に溶け込んでいる姿を見せたりするなど、つねに展示方法に工夫と改善を取り入れ、多様な伝え方を提供できるよう取り組みます。

子どもだけでなく、大人にも満足してもらえる学術的な内容や、幅広い年齢層に対応できるプログラムやサインに、科学的な最新の情報をどんどん導入します。

本来は異なる地域や環境に住む動物を、同じ場所で比較観察できるのは、動物園ならではの醍醐味です。動物たちの体や行動の特徴を比較観察することで、生物の多様さを実感できるよう、展示や解説に工夫を凝らします。

動物に触れることは、感受性が育くみ、動物園への好奇心や親近感や惹きだすことにつながると考え、動物とのふれあいの場を提供します。触れる対象は、畜産種や愛玩種に限定し、野生動物種については、ペット的な動物観を植え付けることのないよう配慮します。

動物の野生的な姿に「怖さ」を感じたり、動物の死に「悲しみ」を味わったり、野生動物の生息環境の悪化状況に「怒り」を覚えたりと、生命に対する感情を刺激する伝え方を心掛け情操教育としての効果を発揮します。



☑ プログラムの充実



多様なアプローチ展開

学校教育にも有効に利用してもらえるサインやプログラムを作成します。学校教育との連携を深めるため、園内を活用した環境教育プログラムを積極的に小中学校に向けて発信していきます。また、より動物や環境への理解を促すための教材の開発、博物館や外部の自然観察会などとの連携により、発展的な教育を目指します。

動物園内だけにとどまらない教育活動を展開します。自然と共生する社会を築くためには、動物園の動物にかぎらず、実際に野外で自然観察を行うなど、様々な生物や環境問題に関する普及啓発活動を実施します。

動物園全体のデザイン（トータルデザイン）も、円山動物園のコンセプトやメッセージを伝えるために重要な意味を持ちます。展示やサインだけでなく、施設の造形や外観、構造物など、隅々に至るまで、重要な教育教材となりえます。隅々まで教育的な配慮が行き渡らせます。



☑ 自然観察会

普及啓発の場を、動物園内だけにとどめず。野外にでて自然観察会を実施する。



☑ 教材の提供

画像
コウモリのトランクきつとなど
準備中



Ⅲ 基本理念を支える取り組み



調査研究

Ⅲ-1. 動物のこゝと環境のこゝを探究する

円山動物園が基本理念である保全や教育を展開するうえで、調査研究は大きな支えとなります。研究機関や民間団体などと協力して、野生動物種の生態の解明をはじめ、動物園に関するさまざまな調査・研究に取り組みます。



なぜ動物園で調査・研究？

野生下での生態や行動が分かっていない動物種は数多くあります。動物園の飼育動物を対象とした研究は、野外での研究を補完し、野生動物の保全に大きく貢献することになります。既存の知見や情報だけでなく、新しい事実を発見し伝えることは、教育面でも不可欠です。また、動物園が取り組む繁殖や飼育に関する研究、最適な飼育環境を整えるための動物福祉に関する研究は、動物園だけに限らず、広く世の中の動物の飼育状況の改善にも役立ちます。

すべての事柄について探究する

動物の生理や行動に関する内容、獣医学的な内容を主な対象としつつ、それ以外にも、たとえば動物園の効率的な経営や利用者の動態といった運営に関する研究、野外の保全活動に寄与するための研究など、動物園に関係するすべての項目に対して、調査や研究を推進します。

調査・研究をより効果的に進められるよう園内の体制を整備します。できるだけ多くの職員が、調査・研究に携わることのできる時間と環境を整えるとともに、外部機関との共同研究を効率よく提携できるよう、また外部からの研究協力の要請に対応できるような体制を作ります。

外部からの共同研究の打診にこたえるだけでなく、自分たちから新たな研究テーマをうちだし、主体的な調査研究を展開します。調査研究に必要な予算を確保し、動物園から外部へ積極的に協同を働き掛けます。効果的で新しい研究を自ら立案し、企画し、実行します。



☑ センターラボ

円山動物園の爬虫類両生類館の中央にある研究施設。希少な爬虫類両棲類の飼育や繁殖技術の確立に取り組んでいる。



調査・研究の技能を磨く

調査研究の技術を磨くために、積極的に外部から講師を招聘します。また、調査や分析技術の習得のために、園外での研修や技能訓練を受けます。職員がつねに新しい調査方法や研究方法を学べる体制を確立します。

動物園関連の集会だけでなく、関係する学会や研究集会に参加します。機会があるごとに、情報収集と人脈づくりに励み、調査研究に対する信頼と期待を受ける存在となります。

日常的に、新しい発見や、改善のための研究テーマを意識します。園内でも定期的に研究発表会や情報交換会を催し、相互的なレベルアップを図ります。

調査や研究の結果を、確実に学会や論文で発表します。関係機関に情報を提供するとともに、市民に対しても分かりやすい報告書を作成したり、成果報告会や市民向けフォーラムを開催するなど、研究成果を還元します。





Ⅲ-2. 創造的に楽しむ

円山動物園が理念に掲げる『保全』や『教育』を最大限に達成するためには、「レクリエーション」機能をしっかり発揮することが必要です。より楽しい、より居心地のよい空間を創り出すことが、理念の達成には欠かせません。



レクリエーションの場としての動物園

レクリエーションには「娯楽」や「保養」といった意味があります。世の中には多種多様な娯楽や趣味が存在しますが、動物に関心を持ち、観察したり知識を得ることも、子供から大人まで非常に浸透したレクリエーションの一つです。円山動物園は札幌市の公共施設として、市民の皆さんに、動物を楽しむというレクリエーションを提供する役割を担います。動物に関する知的好奇心や娯楽的欲求を満たせるような、楽しく居心地のよい時間と空間を提供することが動物園の役割です。

動物を楽しむという文化を根付かせる

来園者の皆さんにより楽しんでもらうために、サインなどの展示物について工夫を凝らしたり、体験型のイベントや、案内ガイド、特別展の実施などの取り組みを充実させます。

動物への興味・関心は、絵画や音楽などと同様に、奥の深い文化的対象です。熱心な「こだわり」をもつ方々にも満足してもらえるような、深い見識や情報を提供します。

行動観察のポイントや、他の動物との比較、最新情報から豆知識まで、よりいっそう動物好きになってもらえるよう情報発信します。はじめての方から、何度も訪れてくれる方まで、幅広く楽しんでもらえるよう工夫します。



全ての職員が、来園者を楽しませる役割を果たします。気軽に声かけてもらえるよう、なんでも質問してもらえるよう対応します。良質なエンターテインメントを提供できるよう、説明の仕方や話し方、楽しませ方の技術を磨きます。

☑ 展示の工夫

いつまでも見ていたい、何度でも見たくなる、見るたびに違った動物の姿が見られる、そんな展示方法を目指します。動物たちがいきいきと本来の姿を見せてくれる展示施設を目指せば、よりいっそう楽しい空間になるでしょう。



良質な憩いの空間を提供

動物を観察したりサインを閲覧したりするだけでなく、動物の絵を描いたり、写真をとったり、お弁当を食べたり、くつろいだりと、様々な利用の仕方を満足してもらえよう、安全で快適な空間を目指します。

誰もが気軽に訪れることができ、安全に楽しく、気持ちよく過ごせる場所とするために、利用者の声をよく聞き、ニーズに合った施設づくりを行います。職員全員が、来園者への対応、案内、解説の技能の向上を目指します。

小さなお子さんやお年寄り、体の不自由な方でも、安全に園内を歩き、安心して過ごせるよう。バリアフリー化をはじめ、園内を整備します。

売店や食堂施設なども含めて、動物園全体で楽しんでもらえるよう、細部にまで配慮して、トータルコーディネートを施します。

(画像)
お弁当食べている
シーンなど





Ⅲ-3. すべての命に最良の暮らしを

動物福祉に最大限に配慮することは、動物を飼育する者としての責務です。つねに最先端の試みや新たな情報と技術を取り込み、最も適した飼育方法や健康管理・診断・治療を実践します。また、動物の生活の質を高める工夫を、絶えず探求し取り入れます。

動物福祉を第一に考える必要性

飼育動物への福祉を充実させることは、なにより来園者に、動物たちの生き生きとした姿を楽しんでもらうために不可欠です。動物園を憩いの場として機能させるためにも、気分よく動物を見てもらうことが大切です。また、本来の行動と乖離した不自然な状態は、正しい調査・研究の妨げとなるため、研究面でも必須です。できるだけ野生動物本来の行動を引き出すことは、来園者に動物に対する正しい理解を深めてもらう教育効果にも繋がります。

365日、動物たちの安全と健康を

動物たちに、飢えや渇きを感じさせず、本来の食性をしっかり考慮したうえで、栄養面をふまえた正しい飼料を提供します。

万全の医療体制を整え、質の高い獣医療を導入します。日頃から動物診療技術を向上させ、動物たちの病気や痛みに対して、適切な獣医療を施します。

必要な医療行為や健康管理であっても、ときに動物たちに辛い思いをさせることもあります。動物たちの恐怖や抑圧をできるだけ取り除けるよう、適切なハズバンドリートレーニング（診察や治療を受けやすくするための普段からの訓練）を取り入れます。

繁殖や展示状況の改善のために、動物を他の施設に移動させることがあります。最善の注意を払い、決して事故のないよう実行します。

健康管理・診察・治療

日頃から動物の健康管理を行う。適切な診察ができる検査体制を整え、治療が必要な際には、麻酔管理も含めて、安全で効果的な治療を行う。



ハズバンドリートレーニング

動物の健康維持のために必要な行為を、動物自らが進んでとってくれるよう訓練すること。たとえば、採血のために手（肢）を差し出したり、口腔内の検査のために口を開けたりするよう、普段から訓練を重ねる。



自然で快適な生活を

可能な限り本来の行動をとるよう、もともと持っている能力を発揮できるような飼育環境を作ります。つねに注意深く観察し、継続的に改善します。

本来の生息環境に近い飼育環境、あるいは各動物種の生態や行動にあわせた飼育環境を作り出せるよう、動物舎のデザインを改良したり、飼育場の設備を改善したりします。

絶えず新しい環境エンリッチメントを提案・導入することで、豊かな行動のバリエーションを引き出し、動物たちに生理的・行動的な要求を満たせる機会をあたえ続けます。

環境エンリッチメント

動物が本来とる行動を引き出すために、飼育施設に行く工夫のこと。餌を探して食べることに長い時間を費やすことを再現したり、自然に近い環境を作って本来の動作を引き出したり、複数個体で飼うことにより社会的な行動をとれるようにする。



よりよい飼育体制を目指して

動物福祉の取り組みが適切に進められているのか評価するため、モニタリング手法を確立させ、ガイドラインを整備します。生理的な指標、臨床的な指標、行動観察など、科学的な基準を導入して、動物福祉の達成を評価します。

求められる動物福祉の状態を達成するためには、飼育面積の確保も必要です。計画的かつ適切に、飼育種数や飼育個体数を検討します。

動物福祉の概念や達成手段は非常に多様です。職員が共通の認識をもてるよう互いに情報や意見の交換を重ね、動物園をあげて飼育の質を向上をはかります。また、最良の動物福祉を実践できる人材を育成します。

つねに動物福祉を念頭において、飼育・展示施設を改善・改修します。十分な飼育スペースの確保を目指すとともに、老朽化への対応、最新設備の導入など、動物たちが安全かつ快適に暮らせるよう動物舎の補修や新築に取り組みます。





Ⅲ-4. 力をあわせて共に未来へ

円山動物園を支えてくれる専門家やアドバイザー、動物園といっしょに理念を達成してくれるパートナーとともに、保全活動や環境教育活動、調査研究に取り組みます。また、円山動物園が中心となって連携する絆をつくりあげる役割、人材を育成する役割も担います。



動物園にとっての連携とは

動物園が理念を達成したり責務を果たしたりしていくためには、他の動物園・水族館、外部の関係機関、そして市民の方々との繋がりが欠かせません。動物園が、メッセージやコンセプトを伝えるだけでなく、円山動物園自身も、様々な方々とともに学び、ともに考え、ともに成長していきたいと考えています。また、動物園は、様々な関係機関同士をつなぐ役割も担います。企業や公的機関、民間組織、市民などさまざまな人に利用してもらおう動物園だからこそ、それらの間を取り持つ役割を果たすことができます。

市民や民間団体との協働・連携

円山公園をはじめとする市内の公園施設や、地元の市民団体などとも共同して、地域の生態系保全や環境教育に協力して取り組みます。

ガイドボランティアをはじめとし、様々な分野でボランティア活動を拡大し、動物園運営への市民参画を進めます。

生物多様性保全を掲げる札幌市と足並みをそろえ、札幌市の環境保全や、市民参画の推進、人材育成に貢献します。

動物園から、他機関の活動や、実際の野外での観察行動につなげることで、保全活動や教育活動をより発展させることができます。共通の目的や理念を有する外部の諸活動と連携し、保全や教育のより大きな目的の達成が見込まれます。

動物園内で地元の生態系について学んだあと、円山公園や円山原始林で自然の動植物を観察したり、園内を流れる円山川で自然の動植物に触れたりするなど、近隣の生態系と動物園の有機的な連携を図ります。



他の動物園・水族館との協働・連携

国内外の動物園や水族館と、積極的な情報共有や連携を進めます。円山動物園だけでは、各動物の血統管理や域外個体群の維持は成り立ちません。繁殖計画や収集計画を立案するうえでも他園館との連携は不可欠です。他園館との連携により、希少種の保全や野外個体群の維持、包括的な普及啓発に取り組みます。



学校、博物館、教育機関などとの協働・連携

小中学校や高校をはじめとする教育機関、および博物館など教育施設との繋がりを深め、環境教育活動を多角的に推進を進めます。

動物園を訪れる小中学校などに対し、園内での活動を有効にサポートできるよう、学校教員との直接的な関係を築けるよう園内環境を整備します。

出前授業や講演などの園外活動を展開するため、学校や教育機関、市民団体と連携します。また学校の副教材や学習資料を作成を共同で開発します。



大学や研究機関との協働・連携

大学をはじめとする研究機関と連携を強め、動物園に関するあらゆる研究活動の充実と研究成果の共有化を進めます。



民間企業との協働・連携

保全や教育に貢献するための資金を確保したり、世界的な視野での活動、あるいは地域密着の活動を展開するために、様々な民間企業と連携します。CSR(社会貢献)として生物多様性保全やSDGsに取り組んでいる民間企業と連携します。また、円山動物園も積極的により多くの企業に保全への取り組みを呼びかけ、連携を促します。



海外との協働・連携

国際基準を達成できるよう、海外との連携を強化します。飼育や運営に資する情報を入手するだけでなく、保全に関する国際的な動向を把握したり、生息地の近況や最新の知見などを取り入れます。

とくにアジア圏の動物園、研究機関、保全団体などとの連携に力を入れます。円山動物園がアジア地域のネットワークの中核を担い、アジアの生物多様性保全に大きく寄与できるよう努力します。

世界動物園水族館協会(WAZA)やアジア動物園水族館協会(AZA)など、国際的な機関との連携を積極的に進めます。



IV 体制

IV-1. コレクションプラン

基本理念である生物多様性の保全のため、円山動物園のコレクションプランは以下の考えのもと動物種の選定を行う。

考慮すべき項目

- ①保全に関する取り組みの必要性
絶滅の危機に瀕しているもしくは将来的にその恐れがあり、国内外において種の保存に取り組まれている種であるか。
 - ・繁殖・維持・余剰個体飼育施設としての役割
 - ・円山動物園として役割を背負うべき種か
- ②飼育の持続性
動物を持続的に飼育・繁殖させるために、将来的にも入手が可能であるか。
 - ・寿命や国内外での飼育頭数
- ③動物福祉の確保
動物福祉を充実させた飼育環境を用意する事ができるか、また、動物福祉の向上に取り組むことができるか。
 - ・飼育面積・環境の確保
- ④教育・メッセージ
当該動物の飼育によりどんなメッセージが伝えられるか。
 - ・生息地保全のための教育
 - ・生物多様性保全のための教育

IV-2. 行動指針

2050年までに「自然と人間が共生する社会を築く」ためには、札幌市・市民・事業者など全ての主体が、組織や世代を超え互いに学びあい、生物多様性の保全に配慮した行動を着実に実践していく必要があります。

こうした各主体の中で、札幌市円山動物園及び動物園職員は、その中心的役割を果たすとともに、札幌市民はもとより、世界中から訪れる来園者に愛される動物園であり続けます。

▼札幌市円山動物園

- 世界動物園水族館協会（WAZA）に加盟し、積極的に連携することにより、地球規模の生物多様性の保全にさらに貢献します。
- 日本動物園水族館協会（JAZA）の一員として、世界の飼育技術を踏まえ、日本の風土に合った飼育技術及び動物福祉の向上に貢献します。
- 北海道の動物園として、北海道の生物多様性の保全は使命と捉え、北海道内の動物園及び水族館と積極的に連携協力し、率先して取り組みます。
- 円山原始林など自然豊かな円山エリアの中核施設として、周辺にある施設や設備、自然が相互に存在価値を高めあう取組を率先して行います。
- 独立行政法人や特別会計制度への移行のほか、法的整備なども視野に入れた柔軟かつ安定的な運営体制の検討を行います。
- 市役所の関連する組織等の統合し、札幌市として、強力に生物多様性の保全及び環境教育・環境学習を推進できる体制の検討を行います。
- 職員間の連携強化や自由活発に意見が交わされる風通しの良い活力ある職場を構築するため、事務室の効果的な配置を検討します。
- 各職種に求められる役割などの見直しにより、効果的な職員体制の検討を行います。
 - ・各主体との円滑な連携及び長期的経験による判断が求められる園長職の長期配置
 - ・獣医療充実のための獣医師職の安定的な確保
 - ・様々な業務を経験し視野の広い職員を育成するための動物専門員の職域拡大
- 入園料の見直しのほか、基金の創設など、安定的かつ健全な経営体制の構築に取り組みます。
- 園内のみならず、園外においても、環境教育・環境学習の牽引役として機能するため、専属的に対応できる職員を配置します。
- 来園者により快適に過ごしていただくほか、園内における環境教育・環境学習の推進などのため、統一的なデザインの構築に長期かつ専属的に対応できる職員を配置します。

▼動物園職員

- 日々、調査研究に邁進し、最先端の技術と情報を駆使し、時代に沿った動物の飼育に取り組みます。
- 札幌市の動物園であることを自覚し、常に市民や来園者の立場で考え行動します。
- 職員一人一人が自らの能力を最大限に発揮し、チームワークの強みを最大限に生かして業務を遂行します。
- 法令等の遵守のほか、札幌市の定める内部規定や業務マニュアル等に基づき誠実に業務を遂行します。

2050年までに「自然と人間が共生する社会を築く」ためには、札幌市円山動物園や動物園職員のみならず、全ての主体が自主的に行動するとともに、相互に連携して取り組む必要があります。

▼市民

円山動物園を環境教育・環境学習の場として積極的に活用して、豊かな生活の陰で、多くの動植物のすみかが失われているという現実を認識し、生物多様性の保全への配慮を実践します。

また、円山動物園をはじめとした環境に関連する活動団体への寄付など、生物多様性の保全に対する具体的な支援も期待されます。

▼企業

事業活動が生物多様性に及ぼす影響や生物多様性から受けている恩恵を認識し、持続可能な社会に貢献する経営を行うとともに、動物園など生物多様性の保全に取り組んでいる組織や団体への財政支援等、他者との連携を図りながら、社会貢献活動などを通して、生物多様性の保全に貢献します。

▼各種団体

環境に関連する活動団体は、円山動物園を活動の場として積極的に活用するなど、動物園と積極的に連携・協働し、生物多様性の保全に貢献します。

▼大学・研究機関

大学をはじめとする研究機関は、最先端の技術と情報を円山動物園と共有し、動物福祉の実践に取り組むとともに、生物多様性の保全に貢献します。